

# Classical Music and History of Japan

新たなグローバル文化の波

「大正モダン」

Vol. 1

## “Violin & Piano Duo ~ 歴史 Story”

### 「ミハイル・グリゴリエフの物語」

クララ・シューマン：3つのロマンスより1番

Clara Schumann: Andante molto from Three Romances for Violin and Piano, Op. 22

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：ワルツ・スケルツォ

Pyotr Ilyich Tchaikovsky: Valse-Scherzo, Op. 34

幸田延：バイオリンとピアノのためのソナタ第1番より1楽章

Nobu Koda: 1st movement from Sonata for Violin and Piano No. 1 in E flat major

ドミートリイ・ショスタコヴィチ：4つのプレリュード

Dmitrii Shostakovich: Four Preludes, Op. 34

セザール・フランク：バイオリンとピアノのためのソナタより1楽章と2楽章

César Franck: 1st and 2nd movements from Sonata for Violin and Piano, FWV 8

ジェルメーヌ・タイユフェール：バイオリンとピアノのためのソナタ第2番より2楽章

Germaine Tailleferre: Adagietto from Sonata for Violin and Piano No. 2

セザール・フランク：バイオリンとピアノのためのソナタより3楽章と4楽章

César Franck: 3rd. and 4th movements from Sonata for Violin and Piano, FWV 8

[休憩なし 80分公演]

Narration: Mari Lee・小澤 佳永

2021

7.21 (Wed) 19:00

SHIODOME HALL

7.22 (Thu) 19:00

MUSICASA

Illustration: Izumi Masashi



# GLOBAL COLLABORATORS Vol.1

## Artistic Director, Violinist

Mari Lee / マリ・リー

● New York ● Tokyo



Mari Lee は、国際的に活躍するバイオリニストであり起業家でもある。

音楽への探究と聴衆を魅了するコンサートの在り方を追及する彼女は、聴衆、演奏者、作曲家の間のギャップを埋めることを目指すアーティストである。Mari Lee は、ウィグモアホール、フィルハーモニー・ド・パリ、カーネギーホールなどで国際的に活躍するバイオリニストである。Strad Magazine から「非常に印象的」と評価される。ヴェルビエ、マールボロなどの有名なフェスティバルに招待され内田光子、今井信子、キム・カシュカシャン、マーティン・ヘルムヒェンらと共演する。学際的な芸術への強い関心を示す彼女は、付随演劇を取り入れたコンサートプロジェクト Salon Séance(サロン・セアンス)を共同創立。

ミュージシャン、俳優、研究者、脚本家、舞台監督のコラボレーションであるサロン・セアンスは、Tarisio Young Artists Grants など、複数の賞を受賞している。ユーディ・メニューイン音楽院卒業後、ニューイングランド音楽院、ベルリン芸術大学大学院を首席で卒業。ヴァイエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールセミファイナリスト、ロン＝ティボー国際コンクール最年少セミファイナリスト。

使用楽器は、1863 年製 Jean-Baptiste Villaume。

# History Humanities

Planned, produced and presented by



Alacrity



## Researcher

Sayoko Sakakibara / 榎原 小葉子

● San Francisco

兵庫県神戸市生まれ。大阪外国語大学(現・大阪大学)言語社会研究科博士後期課程修了後、東京大学史料編纂所に日本学術振興会特別研究員として在籍。その後、スタンフォード大学大学院歴史学学科博士後期課程修了。学術博士および歴史学博士(Ph.D in History)。専門は、江戸期から明治初期の日本宗教政治史・歴史地理学。現在、江戸時代に作成された瀬戸内海海路図の社会宗教的成立背景について執筆中。主要著書に、「太子信仰と天神信仰」(思文閣出版、2010 年)、Cartographic Japan: History in Maps (University of Chicago Press, 2016)、Mapping Asia: Cartographic Encounters Between East and West (Springer, 2017)(いずれも共著)など。

## Music Advisor

Naoko Sonoda / 園田 奈緒子

● Berlin



ピアニスト。桐朋学園大学音楽学部演奏学科、ベルリン芸術大学を卒業。渡辺ようこ、勝部裕子、奥村洋子、ミハイル・ヴォスクレセンスキー、江澤聖子、ライナー・ベッカーの各氏にピアノを、タベア・ツィンマーマン、ナターリア・グートマンに室内楽を師事。数々の国際コンクールに入賞。ベルリン芸大在学中よりヨーロッパでの演奏活動を始め、2009 年ベルリン・フィルハーモニーにてベルリン交響楽団とベルリンデビュー。現在講師としてベルリン芸術大学、ワイマール音楽大学にて後進の指導にあたるほか、ミュンヘン国際音楽コンクール、チャイコフスキー国際音楽コンクール、クイーン・エリザベート国際コンクールをはじめとするさまざまな国際コンクールに参加する学生たちのピアノパートナーを務める。2013、2019 年ドイツ・マークノイキルヒェ国際音楽コンクール、2015、2018 年ポーランド・ルトスラフスキー国際コンクール、2015 および 2019 年チャイコフスキー国際音楽コンクールにて最優秀伴奏賞を受賞。優れた室内楽パートナーとしてヨーロッパ各地の音楽祭に出演のほか、ロシア・マリンスキー劇場やベルリン・コンツェルトハウス、ニューヨーク・カーネギーホールにてリサイタルに出演。また Genuin の CD 録音ほかドイツ・RBB ラジオ、ZDF テレビ、BR ラジオ、イギリス BBC ラジオ、ラジオルーマニア及び NHK-FM リサイタル等でも演奏が度々取り上げられる。ドイツ・ベルリン在住。

“ グローバルに活躍する 「音楽家」 ”

クラシック音楽家は、過去の音楽を今、そして次世代へと伝えるメッセンジャーであるとともに、新たな時代の音楽と文化を創造する者たちでもある。過去を知り、今をより深く理解することが、新たな文化の創造へとつながる。それは、クラシック音楽家だけにとどまらず全ての現代人に共通する使命だといえよう。私たちが新たな時代の扉を開こうとする今、大正から昭和初期にかけて日本で生きたヨーロッパ人たちの「歴史Story」と彼らの文化であるクラシック音楽を通じて日本におけるグローバル化の原点を皆さまと共に考えていきたい。

Pianist

Kae Ozawa / 小澤 佳永

● Tokyo



小学生から高校生まで、父親の仕事でアメリカ合衆国、イリノイ州にて過ごす。東京芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻を経て同大学大学院修士課程ピアノ専攻修了。現在同大学管打楽科演奏研究員。ヴィオッティ・ヴァルセリア国際ピアノコンクール第三位受賞。ペオリア交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団と協演。中日賞受賞。サントリーホール室内楽アカデミー第1-3期生。サントリーホール、チェンバーミュージックガーデンに出演。  
宗次エンジェルヴァイオリンコンクール、日本木管コンクールにて公式伴奏を務める。

Concert シリーズ

「クラシック音楽と日本の歴史」

大正 ~ 昭和初期

Music

西洋化が急速に推し進められた明治の日本において、西洋クラシック音楽の役割は極めて大きかった。近代音楽教育が始まり、日本の音楽家養成を担う「外国人教師」たちが、ドイツ、オーストリアを中心とした欧米諸国から次々に招かれ、一気に西洋音楽への門戸は開かれた。とはいえ、初めは一般の日本人々にとって、それは縁遠いもので、時折行われるようになった演奏会も、外国人教師ら一部の専門家のみを対象としていた。ところが、徐々に日本人演奏家が増えるとともに、西洋音楽は観客の裾野を広げ、やがて人々の生活の一部として定着していく。それにともない、もっぱらドイツ音楽が中心となっていた日本の音楽文化にも、新たな「グローバル文化の波」がやってくる。

明治末期から大正にかけての日本では、ドイツ、オーストリアだけでなく、フランスやロシアなど、ヨーロッパ各国の音楽が広く聴かれるようになっていった。それは、大正に入ると日本でもレコード制作が始まり、ラジオ放送もスタートしたことで、より多くの人が、より手軽に幅広い音楽に触れることができるようになったからである。これにともない、ハイフェッツ、クライスラー、エルマン、ルービンシュタインといった、欧米のトップレベルの演奏家たちがわざわざ来日し演奏会を行った。やがて時代が進むにつれ、日本からもより多くの学生たちが、西洋音楽を学ぶべくヨーロッパやアメリカへと渡りようになったが、この時期に数多く育った日本を代表する作曲家たちは、西洋的なものを積極的に取り入れ、和洋折衷文化が開いた大正モダン・昭和モダンの時代を象徴する存在となっていった。

本コンサートシリーズ「クラシック音楽と日本の歴史」第1回目の公演では、このような大正から昭和初期の「新たなグローバル文化の波」の中で、当時の人々が日々の暮らしの中で親しんだ作品、欧米から来日した演奏家たちがレコード制作や演奏会で披露した作品、そしてこの時代の日本を代表するバイオリニストであり女性作曲家である幸田 延の作品の演奏と共に、同時代にロシアから日本へ亡命し、西洋音楽が縁で日本人女性と結ばれたロシア人「ミハイル・グリゴリエフの物語」を語る。

Text, Stage Director

Yudai Kamisato / 神里 雄大

● Tokyo



脚本家・演出家。1982年、ペルー共和国リマ市生まれ。2006年「しっぽをつかまれた欲望」(作:パブロ=ピカソ)で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞受賞。2018年「バルバラインの長い坂をくだる話」で第62回岸田國士戯曲賞受賞。各地を訪問し採集したエピソードを元に、移動し越境する人々をテーマにした作品を発表している。近年は文芸誌「新潮」に戯曲が掲載され、ソウル、香港、台北、ニューヨーク、ロンドンなどで翻訳戯曲が上演されるなど、その作家性に注目を集めている。「亡命球児」(「新潮」2013年6月号掲載)によって、小説家としてもデビュー。2016年10月より、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてアルゼンチン・ブエノスアイレスに1年間滞在した。南米各国の日系移民の子孫取材してまとめたノンフィクション/ルポタージュ、「越えていく人—南米、日系の若者たちをたずねて」が亜紀書房より3月10日全国発売。

と「専門家」がコラボレーション”

A truly global collaboration of musicians and experts.

# “クラシック音楽が結んだ日本とロシア、愛のStory”

## 「ミハイル・グリゴリエフの物語」

ロシア人“グリゴリエフ”と日本人“綾”

——— 異国の地で気づいた互いのIdentityと愛との葛藤



“Mischa” and Arakawa Aya  
(a.k.a. Vera Aleksandrovna), 1922?

Courtesy of Paul Gregory

### 日本の歴史 / History of Japan (1920 ~ 1943)

100年前一人のロシア人が、大正から昭和初期の日本にもたらした、小さな“芸術”の芽。それは、やがて人々の暮らしの中で、鮮やかに花開いた。———  
本コンサートシリーズ「クラシック音楽と日本の歴史」第1回公演では、そんな歴史の小さな一ページを紹介する。

革命期のロシアで、日本陸軍のための通訳として活躍した若き将校ミハイル・グリゴリエフは、その任務の特殊性ゆえに国を追われ日本へと渡った。時は1920年。かつて学んだ「音楽」を生活の糧とし、懸命に毎日を生きた彼は、その音楽が縁で、日本人女性・荒川綾と出会い結ばれる。華やかな西洋文化があふれ始めた東京で不自由なく青春を謳歌し、初めて触れる西洋音楽に胸をときめかせていた綾との結婚は、グリゴリエフの人生を大きく動かすこととなった。裕福な実力者であった綾の父親の芸術への深い理解と支援を得て、グリゴリエフは、自らの文学への情熱と学問の喜びを臆することなく深めた。さらに、綾の義兄で詩人の川路柳虹との出会いは、やがてグリゴリエフを東京の文化芸術人サークルの中心へと導いたのである。そのなかにあって、彼にとっての音楽は、やがて生活の糧から、故郷ロシアへの強い思いを癒す薬のような存在となったが、その活動は、日本の人々の生活に小さいながらも着実な足跡を残していった。たとえば、政治思想家丸山眞男が、少年時代に通った映画館「新宿武蔵野館」で、グリゴリエフ指揮による生オーケストラ演奏を親しんだのがきっかけで、生涯クラシック音楽を愛好するようになったように・・・

時代はやがて大きく変わり、穏やかだった二人の生活もまた一変する。日本社会に根ざしてきたグリゴリエフの心は、より故郷ロシアを追い求める一方、急激に進む国際化の波にのまれた綾は、生まれて初めて、日本人としての自分を深く意識せざるを得ない状況に直面する。すれ違いながらも、離れることができなかった彼らの“かすがい”は、西洋と東洋両方の文化を背負った二人の娘たちだったが、今にも崩れそうな夫婦の関係が、かろうじて娘たちに気取られることがなかったのは、グリゴリエフが娘たちとともに、音楽を日々の生活にあふれさせていたからかもしれない。

異国人同士の結婚はまだそれほど多くはなかった時代に、それでも“ごく普通の”夫婦として生きたロシア人青年と日本人女性。そんな二人の生活に寄り添い続けた「音楽」をひも解きながら、日本の人々の暮らしに根ざした西洋クラシック音楽の歴史をたどっていく。

Historical research by Sayoko Sakakibara / 榎原 小葉子

2021. 7.21 (Wed)

19:00 開演 | 18:30 開場

SHIODOME HALL / 汐留ホール

<https://www.shiodomehall.com/>

〒105-0021

東京都港区東新橋 1-7-2

汐留メディアタワーアネックス 1F

TEL: 03-6255-4104

都営地下鉄大江戸線 [汐留駅] エレベーターFの1階から、

汐留メディアタワーアネックスへ徒歩1分

新交通ゆりかもめ [汐留駅] 東出口より汐留メディアタワーアネックスへ徒歩1分

JR、東京メトロ・都営地下鉄 [新橋駅] 南改札汐留口より徒歩約7分

チケット予約受付・購入

■ WEB: <https://alacrity.jp>

■ TEL: 03-5408-9755 (10:00-17:00)

2021. 7.22 (Thu)

19:00 開演 | 18:30 開場

MUSICASA / ムジカーザ

<https://www.musicasa.co.jp/>

〒151-0066

東京都渋谷区西原 3-33-1

TEL: 03-5454-0053

小田急線・東京メトロ千代田線 [代々木上原駅]

東口より徒歩2分

京王新線 [幡ヶ谷駅] 南口より徒歩12分

一般前売: 4.22 (Thu) 10:00 ~

一般: ¥4,000 学生: ¥2,000 (全自由席)

一般販売: 6.15 (Tue) 10:00 ~

一般: ¥4,400 学生: ¥2,200 (全自由席)

※ 未就学児のご入場はお断りしております。

※ 公演内容については事情により変更になる場合がございます。

※ 曲目変更等にもなう払い戻しはいたしませんので、あらかじめご了承ください。

※ TEL からのご予約受付は日・祝日お休み (販売開始日は営業)